

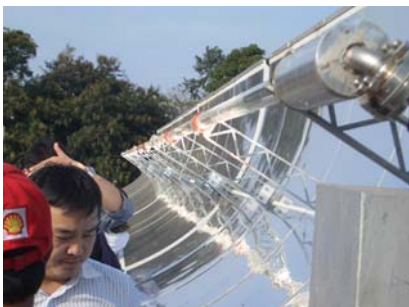
コラム

『ピッサヌローク随想』

戦略・産業ユニット 国際協力・支援 G 谷尾 恭一

バンコックから空路 50 分の北部にある、この町に 2010 年 9 月末に降り立ったのはもちろん初めてであった。途中 4,000m の上空から見ると、一面の緑の水田や大平原をゆったりと大きく蛇行しながら河川が流れており、所々旧河川の取り残されたあとが三日月湖となっており、それらが無数に点在しており陽光を受けてまばゆいくらいに輝いている。なぜこの町にやってきたのか？ 軽装の旅行者風情ではあるものの、やはりビジネスマンと思しき 5 人が空港に降り立ち、街中のホテルに向かっていく。9 月末で地元では雨季らしく空はどんより曇っている。街道沿いのドリアン、マンゴステイン、ドラゴンフルーツ、バナナなどの露店や食堂が並ぶ道を抜けると市の中心部と思しき所に、鉄道の駅舎がオープンスペース的に広がっており、日本では昭和初期と思われる蒸気機関車が展示されているのを見たときに、何か懐かしさ、親しさを覚えた。

今回は何しに来たのであったかを忘れるくらいにのどかな雰囲気に入れることが出来る場所である。ホテルから 30 分ほど西に行ったところにある国立のナレスアン大学内の SERT (再生可能エネルギー研究所) と、再生可能エネルギーの各国のマスタートレーナーつまり日本で教育できる専門家を育成するための研修をアジア 6 カ国から合計 30 名集めて実施するための契約の打ち合わせに訪タイしたのであった。現在進行中の事業であり、委託元の手前、中身をあまり詳細には書けないが、概略くらいは許されよう。この SERT には、太陽光発電、太陽熱、バイオマス発電等の研究、研修設



備がかなり整っており、学生が伸びやかに自由な、緑豊かなキャンパスで学んでいる姿は、おおらかで、一昔前の日本のキャンパス風景を見ているような印象である。この大学は学生総数が 2.5 万人とマンモス大学として有名校の一つである。

その後機会があつて研修生を連れて、バンコックから北西に 3 時間かかるロブリー県に建設中のメガソーラーサイトを視察する機会を得た。2011 年末ごろ完成予定で 73MW と世界最大規模に匹敵するもので、タイの日射量から言って太陽光発電はタイ国には向いており、何か 30 年位前の高度成長期の日本の活気を彷彿とさせるものがあつた (上記右の写真)。



研修の間の休日に、仲間と、ホテル周辺のお寺周りを敢行したが、タイでも結構有名なお寺で地元では「ワット・ヤイ」(大きいお寺)と愛称で呼ばれ、またその本堂に安置されたタイで最も美しいといわれる黄金の仏像「プラプットタシンアラート」(地



元では「大きい仏像」と呼ぶ)を見た。また神秘的な回廊にずらりと並んだ黄金の仏像の姿には目を見張ったものだ。金箔というとは何か安っぽいので、黄金のというが、全体が黄金ではないことはもちろんである。

その後、ピッサヌロークのジャー・ターウィー博物館を訪ねたが、これは当地で始めて出来た民族博物館である。この博物館を作った人の名前がタウィー・ブ



ーンラケート氏であり彼は古美術の研究家で仏像の鍛造も行っている方であり、私財をつぎこんで設立された私立のものである。館内を巡ると、ピッサヌロークの古地図なども展示され、当地の歴史と文化が手に取るように分かる。この地域は古くから人が住んでおり、750 年ほど前にタイ人が始めて建国した国家であるスコタイは、ピッサヌロークから北西 1 時間半ほどの距離にある。またナレースワン大学の名前にも冠されているタイ人で初の国王であるナレースワン大王が誕生したのも当地である。この博物館は有名であるらしく、われわれ以外にも日本人のカップルが 2 組も来ていたのには少なからず驚いた。(博物館と館長の名 : Sgt. Maj. Thawee Folk Museum)

研修生に触れておこう。研修生は 6 ヶ国から来ており、真面目な連中とそうでない連中とに分か



れ、またすでに相当高い水準の電力ならびに再生可能エネルギー分野の知見を有する者でさらに上を目指そうという、一部大学の准教授、講師クラスも含む人たち、そうかと思えば、まだ初歩から中級的な人たちと、さまざまである。各国の SV (スーパーバイザー) にある程度水準を指定して選別してもらったものの、結構ばらつきがあり、これは理解度テストの結果を見ると明らかである。研修生全体を見渡すと、若い世

代が真面目な態度で必死に知識を吸収し、自国の今以上の発展の為に先進国の水準に必死に追いつこうと努力している姿が印象深い。押しなべて水準がかなり高い研修生が多く、今後飛躍的に伸びそうな予感を抱かせるものがあつた。日本も今後、うかうかしてられないとの危機感すら覚える次第である。



研修の合間などに外の芝生の上などで三々五々休憩して談笑している姿を見ると、モンゴルはさすがにチンギスハンの国であり、大陸的なおおらかさがあり大草原を馬に乗って走っていた雰囲気が漂っている。フィリピンはさすがにラテンの血がそうさせるのか、一部の人はややのんびりしている面もあるが、発表などでも、やるときはやる式の一発勝負には強い面がありそうだ。総じて研修 6 カ国の女性は優秀な人が選抜されてきていることもあろうが、優秀でしっかりした人が多いと感じた次第である。